

(中略)

拾八口

右者眾人十右工門家屋敷・諸道具調所おさせつけられ、見分の左め張り越し吟味仕り候ところ、書面の通り相違御座無く候。七右右諸道具の義は、内所字寄・地目付ともへ預けおき申し候。此段申上げ候 以上

御徒士目付 下川 勝左 丑門 印
小 頭 山田 作兵衛 印

(おわり)

便りの中から

地震と高山海岸のこと

藩江新野野河

吉田 勝一 老より

(上略) 昨年は先生の御尽力で所史ができて、所長は感激謝しています。今後は何時々までも所史は保存され役立つことと思えます。現在の藩江町高山・元嶽海岸のこと、書いてはしなかったことがありましたが、所史には昔の地震のことは書いてありましたが、その時に藩江の背平山が約四分の一が海に沈み、その山の土が高山元嶽の新しい海岸をつくったといえます。

現在の新高敷世付迄までがそれまで一面の海で、藩江行きは通陸及海岸の上の山の中を通って、その道は現在もはつきり残っています。

高山海岸現在のすな地は全部海でそれが百五十年も二百年もかかると追々出来たといふと、私に祖母たちからも聞いています。

地震によって自然の地形が変ったこと、他ではあまり例のないこと、藩江所史に書き残したかったと思つてままた書いて見ました。

(下略)

編集者いこう——惜しいことでした。宝永四年(約三〇年前)か、

なげ北代安政元年(百三十四年前)の地震でしょうか。今度藩江に

探訪記録

御土碑文巡り (一)

相江 野々下留蔵の碑

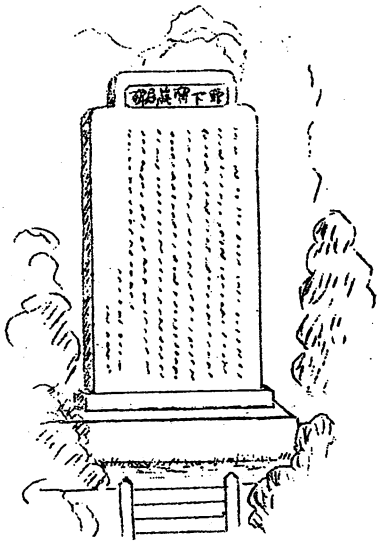
会員 山本 保

佐伯市相江區、江國寺(禪宗)の境内、左手一段高いところ、次のような「野々下留蔵記念碑」が佇んでいます。

(注) 原文のままであるが、読者の便を考へて句読点を加え、且つ文意を汲んで段落を設けたことをお断りしておきます。記念碑の様式はおおよそスケッチのようです。

碑面・文字

野々下留蔵君碑



野々下留蔵君碑 (相江 江國寺境内)

昭和二十年六月二十九日、米國ノ飛行機門司市(注現在北九州市門司區)ヲ攻撃シ、至ル所ニ極威ヲ逞シクシ、明治屋支店モ亦烈火ノ襲フ所

(文ニエツリ)

トナル。

明治屋支店ニ野々下留蔵君アリ。夫人すて子ト店員永見ふみ子ヲ引率シテ、百方防火ニ努ムルモ、火勢益々張大スルヲ以テ、大呼シテ、「火ハ瀕レ延ヲ以テ消シ得ベシ、頭髪ニ水ヲソソギテ火傷ヲ防ゲルト激励スルモ、事遂ニ為スベカラザルヲ見ルヤ、親シク二人ノ手ヲ執リ、誘導シテ構外ニ出デシメ、火ノ十キ方ニ避難セヨ、予ノコトハ之ヲ憂フル勿レト云ツテ、構内ニ向ツテ走り其ノ行ク所ヲ知ラズ。

翌日ニ至ルモ、衆皆野々下君ヲ見ザルヲ以テ、二十六歳ニシテ明治屋ニ入り、精励恪勤ヲ以テ名アリ、昭和十九年十月ヨリ常直ノ職ニ在リ、責任觀念ノ強固ナル彼ハ、或ハ猛火ニ中テラレテ斃レシナラント想像スルノミ。

巴ニシテ七月四日(注、火災後六日)、火後ノ熱氣稍衰フル時、衆皆相集リテ地下室、蓋ヲ開クヤ、其処ニ鉄兜ト半バ焦ゲタル頭中ヲ傍ニ置キ、金庫ノ前ニ静座スルガ如キ野々下君ノ死体ヲ発見シ、十一日ニ至リ、又金庫ノ扉ノ附近ニ於テ、青鉛筆ト赤鉛筆ヲ以テ書ケル遺書アルヲ見ル。

之ニヨレバ、「消火栓ヨリ水出デズ、電燈モ消ユルヲ以テ、蠟燭ノ光ニヨリ遺書ヲ書ク。人事ヲ尽シテ天命ヲ待ツ。平生ヨリ、死所ヲ店ト定メタリトト記シ、同僚ニ別レヲ告ゲ、而シテ「遺憾スレバ安心シテ死スルコトガ出来ル。死ヲ遺憾スルモ天井ヨリ物ノ落ツルニ会ヘバ、驚愕スルヲ免レズ。」ト書シ、

其間夫人トふみ子(註、店員)ノ無事ナラシコトヲ繰返シテ書リ、斯カル間ニ呼吸ノ漸ク若シクナリシヲ記シ、「天皇陛下 大日本帝國萬歲」ト記ス。此ノ遺書ハ、其地下室ノ蒸熱中ニ死スル數十分前

ニ書カレタルモノナルガ如シ。

予ハ古來、勇猛將士ノ終焉ヲ記シタル多ク、文書ヲ見ザルモ、恭然トシテ死ヲ待チ、其ノ責任ト信ズル所ヲ守リテ、卒然ト斃カザル此ノ如キハ、未ダ嘗テ見ザル所ナリ。

明治屋社長磯部長蔵君ガ、野々下君ノ終始ヲ予ニ語りテ、碑文ヲ囑セララルルニ会ヒ、予ハ唯感嘆黙聴スルノミニシテ、言語ヲ發スル能ハズ。

嗚呼、是レ人類最高ノ記録ナリ。

区々ノ文字ヲ添加スルヲ要セズ。茲ニ遺書ノ數節ヲ摘載シテ以テ碑文トス。

後ノ之ヲ讀ム者、其ノ倍ズル所ニ遊ミ、任ズル所ヲ守ル大丈夫ノ遺風ヲ追慕スベキナリ。

昭和二十一年四月二十九日

祖密 頼朝官 竹越 敏三 郎 撰
金峯 田中 安太郎 書

ハ向て左側面ノ 明治屋 建之

わたしたちは、故人の遺徳(その責任感)をたたえましよう。

江国寺一帯は、故菅一郎画伯が、生前在びたび画題に選ばれた目どの、風光明媚の土地です。(この項終り)

便りの中から

雪の北陸より

敦賀市

児玉正晴氏より

私と土方の家に生まれ宿命とてもううもろでしようか、また雪深い北陸地に来ています。日本海は冬ノ様相で、佐伯では見られない海のすがたです。雲の愿い毎日雪に変わったり、みぞれになつたり、筆をいざ身にはやはり佐伯の暖かさが好ましい思っています。